

すごいぞ！大規模施設園芸

1. 研修期間 平成29年2月14日（火）～15日（水）
2. 場 所 宮崎県国富町、都城市
3. 研修内容

● 次世代施設園芸導入加速化支援事業視察

有限会社ジェイエイファームみやざき中央（有馬氏より説明）

名 称 宮崎中央地域次世代施設園芸団地運営コンソーシアム

構 成 員 宮崎県、宮崎市、国富町、JA宮崎経済連、富士通等11社

整備概要 低コスト耐候性ハウス4.1ha、種苗供給施設0.7ha
集出荷施設0.4ha

事 業 費 1,443百万円（うち補助金863百万円）

目標収量 ピーマン15 t / 10 a きゅうり25 t / 10 a

取り組み 天敵等を活かした減農薬栽培に取り組み、環境保全型農業の実践を行っている。

また、9棟あるすべてのハウスに木質バイオマス暖房機を導入し、燃料価格に左右されない経営を実践している。さらに、高度なICT技術を利用し、高生産性の栽培管理システムを展開し、次世代農業者の育成にも及んでいる。

本町とは地形、気候等において多少異なるが、この事業を関係者で多面的に分析し、本町にどのように生かすことができるか、様々な視点をもとに、今後の振興と結びつけた取り組みとなるよう、参考にしていきたい。



● 新規就農研修事業

有限会社ジェイエイファームみやざき中央（有馬氏より説明）

本事業は、JA宮崎中央の委託を受けて（有）ジェイエイファームみやざき中央が実施している。

新規就農者を年間10名程度募集し、14棟（1.6ha）のハウスでキュウリ・トマト・ピーマン等の作付け研修を行っている。研修生の募集、選考、決定に関しては、改善を加えながらよりよい方法を模索している。また、研修生に対しては、指導・支援はもちろん、研修終了後は独立から独立後まで様々な課題を乗り越えていけるような支援システムとなっている。

研修生の心得が作業場に大きく掲示されていた。その内容は、新規就農者に対し、農業を習得するためには、強く固い意志と意欲が必要であるという熱い思いが込められていた。研修生は県内だけでなく県外からの希望者もあり、事業への理解が広がりを見せ、現在に至るような大規模な事業へと変容してきた様子が伺えた。



● 都城6次産業化新商品

道の駅都城では、「都城6次産業化商品」コーナーが設置され、販売されている。

都城ゴボウみそ等数十種類陳列されていた。特に印象的だったのは、パッケージが田舎風なものや、鮮やかなフリーズドライ製品等があり、消費者を引き付ける工夫があちこちにされていることだった。また、健康茶の種類も多かった。健康志向の幅広い年齢層に受け入れられそうだと感じた。

このような商品を参考に、本町ならではのオリジナル商品の開発に取り組んでいきたい。



生きがいと共助！

1. 研修期間 平成29年2月2日(木)～3日(金)
2. 場 所 鹿屋市串良町柳谷(やねだん)・始良市(鹿児島県防災研修センター)
3. 出席者 議会全員、佐藤町長、坂田まちづくり課長、深浦事務局長

I 研修先と目的

地域住民が参加し、地域活性化、地域施策の取り組みを行っている、そのことを学び本町の地域おこしや地方創生に役立てるため「やねだん」を研修した。



豊重館長より研修を受ける

II 研修内容

* 鹿屋市串良町柳谷(やねだん)

鹿児島県大隅半島のほぼ中央に位置する鹿屋市串良町柳谷地区は人口300人、120世帯の高齢化が進む典型的な中山間地域の集落、通称「やねだん」は「行政にたよらない地域再生」に取り組み住民自治の成功例として全国から毎年5,000名以上が視察に訪れている。

ここでは、自分たちで出来ることは自分たちでやる住民自治、地域活動の根幹を支える財源の確保、住民への還元の3つをもとに地域づくりを進められていた。

住民参加の一つとして長老たちとも心がかよえる案として都会に移住している子どもたちからのメッセージを敬老の日、父・母の日に集落の高校生が集落の有線放送でながした。これにより住人のきずなが強まり、自主性をもって全員が参加し、人が持っている才能が発揮され住民活動が広がった。また奉仕をした人には、自治費はとらない制度にしたら人が集まってきた。

財源の確保には、最初に耕作放棄地で高校生とサツマイモを栽培していたが、ぎこちない姿を目にした住民が手伝い、いつの間にか住民参加になり、収益を上げた。

他に焼酎、土着菌、唐辛子、豚味噌等を独自開発し商品販売で、活動の原資となる自主財源の確保が行われている。財源の8割が焼酎である。

還元として毎年一部の住民にボーナスを支給し、高齢者に生きがいと健康づくり福祉一環として、押車、80歳以上の女性にはエステ、小中生には無料の寺小屋、集落葬とゆりかごから墓場までと言われているが火葬場までの福祉の取組みには驚かされた。

人口増・空き家対策には空き家を「迎賓館」と名づけ、文化向上にアーティストの移住促進を開始、受け入れは数人で面接し、腰をすえる覚悟のある人、役員役が回ってきたら引き受けることも了解してもらうことも行っている。また集落では、ある程度生活が出来る様な取組みも行われていた。

地域再生のリーダー育成「故郷創生塾」が平成19年から開催されており、これまで838名の塾卒生が全国で活躍している。地域振興に携わる熱血感にあふれる者が対象となっている。わが南関町からも参加を示されているので頼もしいものである。

10年20年先をみすえた施策、継続こそ、地域再生が成功に結び付くことができるようになるのではないかとの思いで、20年間柳谷自治公民館長をつとめている豊重哲郎館長の熱意ある講演に時を忘れ、予定時間を1時間もオーバーしたが、あっと言う間の感じであった。

4. ま と め

地域再生は真心と情熱をもって本気で向かうことが大事である。満点のリーダーはいない。一人で行わず、皆が主役であることを納得してもらい住民とともに活動することが地域創生になるものではないか。

今回の地方創生特別委員会の研修では各議員が真剣に取り組まれて、本町を活性化させ、次世代の子供たちにどう引き継ぐかを学んだ貴重な研修であった。

また、去年は熊本県にとっては災害が多かった年であり、防災に関する意識の向上を図るため鹿児島県防災研修センターでも研修を受けた。

高校生議会にエール!!

広報常任委員 立山 比呂志

今年の2月6日、町役場において南関高校生による議会が行われました。

議長に富永君、大森君、議員12名を1～3班に分け、町長をはじめとする町執行部に高校生ならではの質問を行いました。

高校生議員が今後の町をどのように改善し盛り上げていくのかとの思いで質問したことがたくさんありました。紙面の関係上、抜粋してお伝えします。

■ 1 班

- 高齢者の健康を増進させるために「元気づくりクラブ」を実施しているが、参加率はどれくらいか。また、参加していない高齢者にはどのような呼びかけや支援をしているか。次に高齢者支援について「住んでよかったプロジェクト」では、子ども支援や保育支援は充実しているが、高齢者支援が少ないように思える。
- 南関高校跡地の一部を介護施設として活用できたらという声があるが町の考えを尋ねる。
- 食の自立支援サービス事業について一人当たりの配食数が週2回以内とは少なすぎるのではないか。
- 地域の一体化を図るために高齢者と小中学校を月に1回程度ふれあう機会を義務付けしてはどうか。

■ 2 班

- 私が住んでいる地域では、稲刈りを終えた後、菜の花の種を植え、春先に川沿いに咲き誇る菜の花の景気を楽しむイベントがあります。町外の方も足を止め写真を撮るなどされています。町をもっと他の地域の人に知ってもらうためにこのようなイベントを行ってみてはどうか。
- 町の特産品には若者向けのスイーツが少ないように思います。本校の情報コースが開発した万次郎カボチャのスイーツ以外に町の特産品を活用したスイーツなど新商品を開発する支援策をとって町おこしができないか。
- 空き家バンク事業で今までにどれくらいの利用がありましたか、利用者が少なければ助成金の制度を加えてみてはどうか。
- 町では陶器が有名です。陶芸に興味がある若者や外国人が陶芸に集中できるよう一定期間、低額で家を貸してはどうか。



■ 3 班

- ファミリーサポート事業について、今年度から始まったと聞いたがどのように制度を周知したのか。月別の利用状況を教えてください。
- 保健所等での事故がニュースにしばしば取り上げられますが、ファミリーサポートの協力会員になるには何か資格は必要ですか。必要でない場合、定期的な研修などはされているのか。
- 町外小中学校給食費等補助金ですが、今年度から制度が始まりましたが、わざわざ町外の学校に通う家庭に補助金を出す必要はないのではないかと、この制度を続けていくと町の子供たちが町外にどんどん出て行ってしまうのではないかと。
- 子ども医療補助金についてですが、医療費の請求、町では償還払いの場合、利用日の月から1年以内となっていますが、請求は郵送でも受け付けているのでしょうか。

など、かなり深く掘り下げた質問が多く出ました。答弁等は町ホームページをご覧ください。真剣に取り組まれた高校生諸君にエールを送ります。

議会だより(43号)発刊における訂正とお詫び

平成28年11月15日発行の「山郷・第43号」の11ページ文教厚生常任委員会・研修報告書の「③取り組みの特徴」文章において、下記のアンダーライン部分で示した他の報告書の文章が混在しておりました。編集過程での間違いに広報委員長としてお詫びして訂正させていただきます。再読の場合、アンダーライン部分を削除してお読みください。

広報常任委員長 本田 眞二

記

③ 取り組みの特徴

珠洲市では、全国に先駆け、バイオマスエネルギー推進事業として平成19年8月からバイオマスメタン発酵処理施設に●文科省特例校として英語力を養う取り組み・きらりえいご科の実践、小学校 1～2年次から英語教科の活動の時間を設置 ●ふるさと愛を育む教育として生活、総合の時間内で「ふるさと珠洲科」を実施 ●コミュニケーション能力を高める活動として異学年交流機会の充実、外国人との交流、体験入学、地域住民との交流 ●相互乗り入れ授業等に取り組まれている。

別れと感謝! そして飛躍!

広報常任委員長 本田 眞二

平成29年3月1日、南関高校が89年の歴史を閉じた。卒業生1万1,507人。

熊本県教育委員会より一方的に理不尽ともいえる統廃合の決定を受け、南関高校が閉校した。閉校決定からこれまで、重岡校長、前校長の下田先生そして多くの先生方には、生徒たちと親身に向き合っていただき感謝と称賛を贈らせていただきます。

当日、卒業式後、閉校式が執り行われた。ここで、あいさつに立たれた方々のメッセージの一部を簡略で紹介します。

卒業式

重岡忠希校長式辞：卒業生へ、セキアでの食事メニュー作りなどの商品開発、介護予防運動の創作など校訓「進取」、「向学」、「至誠」を成し遂げた。江上新先生の南関高校魂を成し遂げた。

内野県議あいさつ：卒業生15名が益城町・西原村などへ被災支援されたことに、感謝と成長の実感を伝え、胸を張って卒業してほしい。

多田隈保護者会会長：松岡修造の言葉を借りて卒業生へ「反省をしろ、後悔はするな」と励まし、自らが地震被害者にも拘わらず、生徒のため駆けつけていただいた先生方へ感謝を伝えた。

富永みな卒業生総代：中学のときは学校へ行けなかった。高校へ入り、演劇や音楽と出会い高校生活を充実できた。先生方と生徒の距離が近く親戚のようだった。



閉校式

(表紙の写真)

重岡忠希校長：89年の歴史を閉じる。感謝。江上新先生が基礎を作っていた。23年間の読書活動は文部科学大臣賞受賞。南高伝説として語り継がれると確信。

福田同窓会長：89年間町の中心に位置していた。名簿管理は岱志高校へ引き継がれる。

橋本梓生徒会長：さみしさでいっぱい。南関高校が大好き。仲間・先生・地域の支援に感謝。ありがとうございました。

佐藤町長：南関高校はこれまで地域の発展に貢献してきた。自身も卒業生として当時を振り返ると、陸上など県大会、全国大会へ出場するほど活気にあふれていた。南関高校存続活動を含め、これまでの同窓会、育友会の方々の支援に感謝いたします。と述べた。



以上、印象に残った挨拶を抜粋した形で載せました。

15名の生徒の卒業と同時に南関高校は閉校いたしました。礎を築かれた江上新先生、今まで支えていただいた多くの関係者の皆さんへ大きな感謝を伝えさせていただきます。そして、先人たちの想いに報いるべく、この地を大きく飛躍、活躍できるよう努力することが、今の我々の使命ではと感じました。

最後に南関高校の歴史を下記に示します。

- 1926年7月 - 藤川與太郎氏が淑徳女塾創立
- 1928年4月 - 熊本県南関女学校に改める
- 1929年4月 - 熊本県南関実科高等女学校に改める
(江上新氏、私有地を提供して、現在の校地に学校を移築。)
- 1944年3月 - 熊本県に移管して熊本県立南関高等女学校に改める
- 1948年4月 - 学制改革により熊本県立南関高等学校に改め、男女共学になる
- 1988年4月 - 普通科4学級の中に情報コースと美術工芸コースからなる1学級新設
- 1994年4月 - 普通科4学級の中にスポーツコミュニケーションコースと
ヒューマンコミュニケーションコースからなる1学級新設
- 1998年11月 - 創立70周年記念式典
- 2008年11月 - 創立80周年記念式典
- 2017年3月1日 - 閉校

